

” Verb-Particle” 構文の派生について : 機能主義的観点から

江口, 巧
九州大学言語文化部言語科学部門

<https://doi.org/10.15017/6796378>

出版情報 : 言語科学. 34, pp. 35-50, 1999-02-27. 九州大学言語文化部言語研究会
バージョン :
権利関係 :



“Verb-Particle”構文の派生について： 機能主義的観点から

江口 巧

1. 序

英語には、次に示すようないわゆる“verb-particle”結合を含む構文が存在する。

(1) They turned on the light.

(2) The man looked up the information.

この結合で動詞の後ろにくる語は、常に語形変化のない範疇の語であり、時に前置詞までも含めて不変化詞と呼ばれることがあるが、本稿では、副詞のみを不変化詞として扱うことにする。したがって、“look after” や “go into” など “動詞-前置詞” 結合は、本稿の考察の対象としない。

さて、この“動詞-不変化詞”結合を含む構文は、(3)に示すように、不変化詞を目的語名詞句の後に置くことも可能である。

(3) They turned the light on.

このことから、この構文の基底構造をめぐる、過去に主に生成文法家の間で議論が交わされてきた。それらの議論は、統語的および意味的根拠に基づき、(1)、(2)のように“動詞-不変化詞-名詞句”を基底構造とするもの (e.g. Chomsky 1957, Fraser 1974, Radford 1988) と、(3)のように “動詞-名詞句-不変化詞” を基底構造とするもの (e.g. Emonds 1972, Dixon 1982, Kayne 1984, Aarts 1989) とに大別される。そして交替形への派生については、仮定された基底構造により、不変化詞の右方向への移動、もしくは左方向への移動が想定され、また場合には不変化詞でなく目的語名詞句の移動が想定されているケースもある。

本稿のねらいは、この “動詞-不変化詞” 構文の基底構造を、従来の研究ではほとんど見られなかった機能主義的観点から探ることである。そこでまず次章で、過去の研究のうちのいくつかを取り上げてその論旨を概観し、3章で筆者独自の機能主義的視点からみたこの構文の基底構造を提示する。なおここでは、“動詞-不変化詞-名詞句” か、あるいは “動詞-名詞句-不変化詞” か、つまりその線状的順序を問題とし、それ以上の細かい統語構造には立ち入らない。またあわせて、“動詞-不変化詞” 結合と構造的に混同されやすい “動詞-前置詞” 結合について、認知文法の概念を導入して、その構造的違いを明らかにする。4章では、3章で仮定した基底構造からもうひとつの交替形への派生を誘発する要因を探る。5章は要約である。

なお以下の章では、簡略化のため、統語範疇の連結を示す際、特に支障のない限り、動詞(句)にはV(P)、不変化詞にはPrt、名詞(句)にはN(P)、前置詞(句)にはP(P)という

表記をあてることを付記しておく。

2. 過去の研究

この章では、過去において“V-Prt”構文の基底構造と、その交替形への派生を取り扱った三つの研究を取り上げ、その論旨を整理する。

まず、Chomsky(1957)は、(4)のような“V-Prt-NP”が基底構造であり、(5)は不変化詞の右方向への移動によって派生した構造であるとした。

(4) the police brought in the criminal

(5) the police brought the criminal in

Chomskyが(4)を基底構造とした理由は、本来ひとまとまりをなす要素が「不連続であっては、句構造文法でうまく取り扱えない」というものである。そして彼は、(4)のままで文法的であることから、この変形規則は随意的なものである一方で、目的語名詞句が代名詞の場合は、この規則は義務的に適用されなければならないとした。

(6) the police brought him in

(7) *the police brought in him

次に、Kayne(1984)は、前述のChomskyとは対照的に、“V-NP-Prt”を基底構造としている。そして彼の分析の特徴は、“V-Prt”構文に、一律に小節(small clause)分析を行っていることである。

(8) [_{VP} V [_{sc} NP Prt]]

つまり、名詞句と不変化詞との間で主述関係が成立しているとするものである。Kayneのこの分析に対しては、Suzuki(1994)が、例えば“look up”のようないわゆるイディオム的な“V-Prt”結合に対して(9)のような基底構造を設定した場合、主述関係にあるとされる the information と up で、up が the information にどのような θ -roleを与えるかが不明であり、また動詞 look と up の密接な結びつきがこの分析ではとらえられないなどとして批判している。

(9) She [_{VP} [_V looked] [_{sc} [_{NP} the information] [_{Prt} up]]]

最後に、Aarts(1989)の分析を取り上げる。彼の分析の興味深い点は、“V-Prt”結合を、(10)のように空間・結果的な意味、つまり文字通りの意味をもつもの(A-動詞)と、(11)のようにイディオム的な意味をもつもの(B-動詞)とに分類していることである。“V-Prt”結合にこのような二つのタイプが存在することは、既に多くの文法家が認めていることであるが、Aartsは、(12)、(13)に示すように、この意味的違いをその基底構造にも反映させている。

(10) I switched the light off.

(11) I looked the information up.

(12) A-verb: [_{VP} V [_{IP} NP Prt]]¹

(13) B-verb: [_{VP} V NP Prt]

A-動詞、B-動詞ともに、“動詞-名詞句-不変化詞”の線状的順序は変わらないが、動詞句全体の内部構造が異なっている点が注目される。A-動詞については、Aartsは Kayne (1984)のいうように、名詞句と不変化詞との間に主述関係が成立することから、この二つの語句は小節、つまり IP を形成するが、B-動詞についてはこのことはあてはまらないとしている。その根拠として、Aartsは、A-動詞の“NP-Prt”補部は別の環境でも補部として機能しうる(例(14))が、B-動詞の“NP-Prt”結合はそうではない(例(15))こと、また、A-動詞の補部は、主語の位置に現れうる(例(16))が、B-動詞の場合にはそれが不可能である(例(17))ことなどを挙げている。

(14) Jim turned the radio off; with the radio off he could finally relax.

(15) *My teacher always puts his pupils down; with his pupils down he feels superior.

(16) The oven off is less dangerous than the oven on.

(17) *His pupils down is terrible.

さて、Aartsは、A-動詞、B-動詞ともに、おのおの(12)、(13)の基底構造から、“V-Prt-NP”の構造を得るために、NPの右方向への移動を想定しているが、彼は、移動後の派生形に、「ある要素Aが要素Bを飛び越えて右に移動した場合、AはBよりも重くなければならない」という制約を課している。

以上、“V-Prt”構文の基底構造および派生に関する過去の幾多の研究のうち三つを取り上げ、その論旨を概観してきたが、この構文に対する我々の直感を最もよく反映し、また説得力のある経験上のデータを提示しているという理由で、現段階ではAartsの分析が最も支持できるように思われる。

3. “V-Prt”構文の基底構造—機能主義的アプローチ

1章で触れたように、“V-Prt”構文の基底構造そのものを想定するにあたっては、従来の研究のほとんどが統語的あるいは意味的根拠に基づいたものであり、機能主義的視点からこの問題への接近を試みたものは、私の知る限りない。そこで、この章では、この視点から“V-Prt”構文の基底構造を探ってみたい。

まず、英語の文は一般に、文末に近いほど、重要度のより高い要素が置かれるといわれている。したがって以下(18)から(20)に示すように、対照強勢(contrastive stress)が置かれるのでない限り、代名詞は文末に現れることはない。

(18) I gave Mary {a bundle of flowers/*it}.

(19) *John was shot by {me/you/him}. (福地 (1985: 68))

(20) *Into the building walked he. (高見 (1995: 188))

この理由は、代名詞が用いられる場合、その指示物は直前の文脈で言及されるか、談話

のトピックになっているなど、聞き手にとっては十分に復元可能であるために、そのもつ情報の重要度は低いからである。しかし、上のようなデータがある一方で、文末に代名詞が現れていても全く不自然さを生じることなく容認される文もある。

(21) I went to see it.

(22) Tomorrow I'm going to call on him.²

このように、一見矛盾する現象は、どのように説明されるのであろうか。

文末に代名詞が許容されない(18)-(20)と、許容される(21)-(22)の文をながめてまず気がつくことは、(18)-(20)がいずれも何らかの変形が施された文であるのに対し、(21)-(22)はそうではない、いわば基本形の文であるということである。(18)は二重目的語構文と呼ばれ、生成文法では一般に(23)のような与格構文から派生したものであるとされている。

(23) I gave {a bundle of flowers/ it} to Mary.

(19)は受身文であり、対応する能動文から派生したと考えられる。³ (20)は文体的倒置構文と呼ばれ、主語と方向の副詞句が本来の位置から互いに入れ替わっている。

このように見てくると、変形によって派生した(18)-(20)の文には、そうでない文と異なり、文末に代名詞のように重要度の低い要素がくるのを阻止する要因が存在するといえそうである。すなわち、これらの文の派生には共通して、文末にくる要素をきわだたせるという動機づけがあると考えられ、⁴ それゆえ、その位置に重要度の低い代名詞をもってくることは、この本来の動機づけを否定してしまうことになるのである。一方、(21)、(22)の文は、何か特定の変形が施された文ではないので、本来、上で見たような動機づけも存在しない。したがって、そこから必然的に生じる制約も課されないことになり、文末に代名詞が生じたとしても何ら問題は生じない。

このように、文末にくるべき要素をきわだたせるという要因によって動機づけられた変形は、その結果生じる文に一定の制約を課することになるため、それだけ容認されるための条件が厳しくなる。一方、変形の関わっていない無標(unmarked)の文は、確かに、文末に近づくほどより重要度の高い情報がくるという一般的な情報構造の原則に従うものの、当初の動機づけがない分、容認されるための条件は緩くなるといえる。そして、このことを実証するデータは多い。福地(1985: 69-70)は、Ransom(1977: 420)を引用し、受身文の主語が不定名詞句で、by前置詞句の目的語が定名詞句だと、「旧-新」の原則の完全な違反になる(例(24))が、その一方で、能動文の場合(例(25))は、文脈によって必ずしも「旧-新」の原則に従わなくてもよいとするKuno(1979: 283)の見解に触れている。

(24) ?A cat was chased by the dog.

(25) A dog chased the cat.

能動文は意図的に作られた構文ではないので、(25)は、「旧-新」の原則に違反しても罪は軽いというのである。

また、Erteschik(1979: 454)は、与格構文と二重目的語構文において、文強勢の位置と文の容認性との関係を、(26)-(29)の例を挙げて論じている。

(26) John gave the book to Máry.

(27) John gave the bók to Mary.

(28) John gave Mary the bók.

(29) John gave Máry the book.

無標の構文である与格構文では、(26)、(27)ともに容認される((27)はやや自然さが落ちるものの)のに対し、変形により派生した二重目的語構文では、(28)しか容認されない。この理由をErteschikは、この構文を派生する与格移動規則は、文末に置かれる名詞句に卓越性(dominance)を与えることを強いる規則である(P. 451)と述べている。

同様に、与格構文と二重目的語構文において、目的語の一部が外置された例を、高見(1995: 155)から引用する(下線は筆者)。

(30) I gave a book to Mary yesterday about African music.

(31) I gave candies to a child yesterday with big sad eyes.

(32) I gave Mary a puppy yesterday with cute floppy ears.

(33) *I gave a man an interesting book yesterday with green eyes.

各文において、文末の前置詞句は、下線を施した名詞句の一部が外置したものとなさされたい。その結果、(33)のみが非文となる。高見は、「名詞句からの外置は、外置要素が文中の他の要素より情報の重要度が高いと解釈される場合にのみ、適格となる」という機能論的制約を提示している(p. 143)が、この制約を考慮すれば、二つの構文における外置の可能性の違いは、自ずと説明がつくものである。与格構文の場合は、まさに上の(26)、(27)で見たように、文中、文末の名詞句ともに重要な情報を担いするので、いずれの名詞句の一部を外置しても問題は生じない。一方、二重目的語構文では、文中の間接目的語は重要な情報を担いえないので、その一部を外置してそれに焦点をあてることは不可能である。

以上提示した三つのデータから導かれる要点を改めて示すと、変形の施されていない無標の文は、文の情報構造の一般原則から受ける制約は緩く、⁵ 一方、変形によって派生された文は、制約が厳しく課され、容認されるための条件が厳しくなるということである。また、具体的な現象として、文末に代名詞が許容されるのは、その構文が無標であることを示し、一方、文末に代名詞が許容されないのは、その構文が、文末にくる要素をきわだたせるという動機づけをもつ変形の施された構文であることを強く示唆することになる。このことを念頭において、再び“V-Prt”構文に立ち返ってみたいと思う。

まず、“V-Prt”結合が、名詞句との生起においてどのような制約をどの程度受けるのかを見ていく必要がある。しばしば指摘されるのは、既に(7)((34)として再録)について触れたように、不変化詞の後に(対照強勢のない)代名詞はこれないという点である。

(34) *the police brought in him

(35) *They switched on it.

一方、目的語名詞句が長くなるにつれ、その名詞句は動詞の直後では容認されず、不変化詞の後に現れやすくなる。

(36) *I called the man who left up (下線は筆者)(Fraser (1974: 19))

(37) She always soaks through whatever clothes need washing before putting them in the washing machine. (下線は筆者)(Bolinger (1971: 25))

"V-Prt" 構文で文末に代名詞がおかれた場合の非文法性は、本来は談話的要因によるものと考えられるが、(対照強勢が置かれた場合を除けば)いかなる文脈であれ、代名詞であれば一律に容認されないことから、これはもはや文法に組み込まれた制約といえる。一方、長い名詞句が動詞と不変化詞の間に置かれた場合、これは、それ以上長ければ非文になるという明確な境界があるわけでもなく、また長くなれば文末に置かれるというのも、これは傾向であって、文法の規則といえるものでもない(cf. Kroch(1979: 221))。さらに、長い名詞句であっても、それが談話上旧情報を表わすのであれば、動詞と不変化詞の間にとどまることが福地(1985: 90)で示唆されている。つまり、長い名詞句の場合、上に述べた代名詞の場合ほど絶対的に非文法性を導くといえるものではない。

以上のことを、簡単な表にまとめてみる。

(38) 代名詞・普通名詞句・重名詞句⁶の
"V-Prt" 構文中の位置による容認性

	"V ____ Prt"	"V Prt ____"
Pronouns	OK	*
General NPs	OK	OK
Heavy NPs	?	OK

この表から明らかなように、名詞句との生起に関して制約がより厳しいのは、"V-Prt-NP" の語順の場合である。とすると、先に導かれたことと重ねて考えてみると、変形によって派生した構文の方が無標の構文よりも容認されるための条件が厳しいということであったので、このことから、"V-Prt-NP" が変形によって派生した構造であり、一方の "V-NP-Prt" が基本形であるという結論が導かれる。また、前者の構造が文末に代名詞を許容しないことも、この結論の正当性を裏付けるものである。"V-Prt-NP" 型の構文は、文末にくる要素をきわだたせるという動機づけをもつ変形によって派生した構文であるため、代名詞のように重要度の低い要素は受けつけないからである。

さて、今導いた結論を、今度は2章で見たAartsの分析に照らし合わせて考えてみよう。Aartsは、"V-Prt" 結合を、文字通りの意味をもつものとイディオム的な意味のものにと

分類した。前者の場合、Aartsは次のような基底構造をあて、名詞句と不変化詞の間には主述関係が成立し、この二つの要素がいわゆる小節をなすと分析していた。

(39) A-verb: [_{VP} V [_{IP} NP Prt]]

この種の“V-Prt”結合としてAartsが挙げているものには、1) prop up、2) push down、3) cut off、4) turn off、5) switch on などがある。これらの結合の、特に不変化詞の意味に目を向けると、文字通りの意味を保持しているもの(1)、2)、3))、および、その文字通りの意味から比喩的・抽象的に拡張した意味を有するもの(4)、5))が含まれる。いずれの意味にせよ、これらは目的語名詞句の(結果)状態を表わしており、名詞句と不変化詞は主述関係をなすとしたAartsの小節分析は妥当であると思われる。そして、我々が先に結論づけた“V-NP-Prt”を基底構造とする分析も、これと軌を同じくするものといえよう。ただし、ここではあくまで要素の線状的順序のみの議論にとどめ、動詞句の内部構造にはこれ以上立ち入らないことにする。

では次に、Aartsが B-動詞として分類したイディオム的な動詞についてはどうであろうか。やはりこの類の動詞にも、“V-NP-Prt”を基底構造としてたてることは妥当であろうか。結論から先に述べると、筆者は、イディオム的な “V-Prt”結合に文字通りのタイプと同じ基底構造をあてることには強く懐疑的である。イディオム的というのは、例えば今問題にしている“V-Prt”結合の場合、この結合全体の意味が、動詞と不変化詞それぞれの意味の総和からは推論できないということである。つまり、動詞と不変化詞がまとまって一つの単位として機能しており、その意味で、動詞と不変化詞の語彙的結束性の度合いは、文字通りの結合の場合に比べてかなり高いといえる。このような強い語彙的結束性は当然統語構造にも反映されるべきで、特にそれは深層構造すなわち基底構造に反映されるべきである。とすれば、イディオム的“V-Prt”結合に、動詞と不変化詞が分離した “V-NP-Prt”の基底構造をあてることは、もはや妥当ではなく、二つが隣接した“V-Prt-NP”を基底構造として想定すべきである。学者の中には、Fraser(1974)のように、隣接する“V-Prt”を(すべての“V-Prt”結合について)ひとまとまりの構成素とする分析もあるが、ここでもやはり、要素の線状的順序以上の内部構造には立ち入らないことにする。

さて、イディオム的“V-Prt”結合の場合、ここで想定したように、基底構造で動詞と不変化詞を隣接させておく分析の正当性を裏付けるデータをいくつか挙げておく。

まず、Chen(1986)は、二つのタイプの“V-Prt”結合、すなわち文字通りのタイプとイディオム的なタイプで、不変化詞の右方向への移動の起こる割合を調べたCumming et al.(1982)の調査結果を報告している。それによると、動詞の直後にあると仮定された不変化詞が名詞句を越えて右方向に移動している事例は、文字通りのタイプで全280例中53.57%、一方イディオムタイプで全357例中38.1%であったと報告されている。イディオムタイプの場合、表層的に“V-NP-Prt”の語順をとっているものは、全体の3分の1強に

すぎず、このことから、イディオムタイプでは、動詞と不変化詞が隣接して現れやすいということがいえる。⁷

次に、イディオムタイプの”V-Prt”結合の、名詞的動名詞の派生に関するSuzuki(1994: 347)の議論を、その例文とともに挙げておきたい。

(40) The looking up of the information took a long time.

(41) *The looking of the information up took a long time.

一般に、名詞的動名詞は、対応する文の基底生成された構造に相当するとされており(cf. Chomsky 1970)、このことと(40)、(41)の容認性の違いを考え合わせると、不変化詞は動詞に隣接する位置に基底生成されているということができるとSuzukiは論じている。我々は、Suzukiのこの議論も、我々が先程導いた結論の論拠とすることができる。しかし実は、Suzukiは、”V-Prt”結合はすべて”V-Prt-NP”が基本であるとする立場であり、彼が挙げた例がたまたまイディオム的”V-Prt”結合であったにすぎない。しかし今一度、(40)、(41)と、さらには、Fraser(1974: 3)の挙げた(42)をあわせて考慮すれば、イディオムタイプに”V-Prt-NP”の基底構造を設定することの妥当性ばかりでなく、文字通りのタイプには、それとは異なった基底構造を与えることの妥当性が自ずから見えてくるものと思われる。ちなみに、(42)において、”throw his dinner up”は’食べたものをもどす’という意味のイディオムタイプで、”throw the ball up”は文字通りのタイプである。

(42) His throwing of {*his dinner/the ball} up (instead of down) was stupid.

以上、この章では、”V-Prt”構文の文字通りのタイプには”V-NP-Prt”という基底構造を、イディオム的タイプには”V-Prt-NP”という基底構造を設定することを、その論拠を挙げながら主張してきた。⁸

最後に本章では、補足として、一見、文字通りの”V-Prt”のタイプと混同されやすいタイプの構文について、それと”V-Prt”構文との構造的違いを明らかにすることにより、ここでの議論を終えたいと思う。

Radford(1988: 90ff.)は、”get off”‘降りる’という動詞句と、”put off”‘待たせる’という動詞句との違いについて論じているが、次のような例を挙げ、なぜ”get off”だとphrasal verb(本稿でいう”V-Prt”結合)とは違って、後ろに代名詞がこれ(例(43))、またなぜ間に普通名詞がこれない(例(44))のか、その理由がはっきりしない(p. 99)と述べている。

(43) The trouble with the bus was that drunks would want to get off it every few miles, to exercise their natural bodily functions.

(44) *Drunks would get the bus off.

事実をいうと、Radford自身、”get off”には”put off”と異なり、prepositional verb

という用語をあてていることからわかるように、“get off”の off は、不変化詞ではなく前置詞であるからというのがその答なのだが、“get off the bus”は、例えば“take off the clothes”と一見極めて似ており、構造的には混同されやすいといえる。また、off という語は、実際のデータベース上での調査によると、全使用例中、その約8割において不変化詞として用いられているという報告もある(cf. O’Dowd(1998: 32))が、このような実際の談話上での使用傾向も、“get off the bus”が、“V-Prt”結合と誤解されうるひとつの原因ではないかと思われる。この場合、“get off the bus”の不変化詞は文字通りの意味をもっているとみなしてさしつかえないが、この“V-P”結合を、“V-Prt”結合である“take off the clothes”とは同等に扱えない理由がある。後者は文字通りのタイプであるため、その基底構造は、あえてその内部構造まで示せば、次のようになる。

(45) [VP take [IP the clothes off]]

つまり、ここで the clothes と off の間には、主述関係が成り立っている。ここで、Lindner(1981)が用いた‘トラジェクター’および‘ランドマーク’という用語を用いると、その関係がより明確になる。トラジェクター、ランドマークは、認知文法の用語で、複数のモノが関与していて、そこにある関係が成立している時、その参与者の中できわだつ方をトラジェクターといい、一方トラジェクターの基準点となるものをランドマークと呼ぶ。例えば、“John ran up the hill”という事態において、前置詞 up が表わす関係のトラジェクターはジョンであり、ランドマークは丘である。つまり、走った結果、ジョンは丘を基準点として、その上に位置することになるからである。この概念を用いると、(45)では、不変化詞 off が表わす関係のトラジェクターは衣服であり、ランドマークは語用論的に推論される人の体である。同様に例えば、“bring him in”の場合にも、him と in の間には主述関係が成立し、不変化詞 in が表わす関係のトラジェクターは彼、ランドマークは発話の話し手もしくは聞き手がいる場所、例えば部屋などである。⁹文字通りの“V-Prt”結合の場合、ほぼこのように、不変化詞が表わす関係のトラジェクターは、その“V-Prt”結合の目的語である。ところが一方、“V-P”結合である“get off the bus”の場合、同じく文字通りの意味をもつとしても、the bus と off の間に主述関係は成立しない。

(46) *[VP get [IP the bus off]]

つまり、バスは off が表わす関係のトラジェクターには決してなりえない。その構造はむしろ、次のようになるべきである。

(47) [VP get [PP off the bus]]

つまりここでは、バスは off のランドマークとなっている。そしてトラジェクターは、この文の主語である。すなわち、ある人がバスを降りた結果、バスから離れた状態となるのである。バスは決して off のトラジェクターにはなりえないため、(46)のように、基底構造で off の前にはきえない。(44)が非文となる理由はそこにある。また同時に、

(47)に示した基底構造では、バスは本来 off の後の位置にあるため、(43)のように、代名詞 it を含めていかなる目的語名詞句も前置詞 off の後にしか容認されないのである。

このように、主述関係、ひいては、トラジェクターおよびランドマークという概念を用いることにより、“V-Prt”結合と、それと一見混同されやすい“V-P”結合の構造上の違いを明らかにすることができる。さらに、このような概念に依存した説明は、文字通りのタイプの“V-Prt”構文の基底構造が“V-NP-Prt”であるとする分析の妥当性をさらに裏付けてくれるものである。

4. “V-Prt”構文の交替形への派生を誘発する要因

前章では、“V-Prt”構文に、文字通りのタイプとイディオムのタイプを認め、前者には“V-NP-Prt”という基底構造を、いっぽう後者には“V-Prt-NP”という基底構造を仮定した。基底構造というのは基本形ということであり、何か特別な要因がない限り、その形式で現れるのが普通であるとみなしてよい。3章で触れた Cumming et al. (1982)の調査でも見られた通り、絶対的ではないにせよ、文字通りのタイプ、イディオムタイプ双方とも、表層的にはその基本形の語順で現れる傾向にあった。このような傾向があるからには、表層的にその交替形で現れている場合には、その構文は何か特別な動機づけが引き金となって生じた有標な構文だといえる。ここでは、基本形以外の形式がどのような動機づけによって生じたのか、その要因を探っていきたい。既に、前の章の議論で、文末への要素の移動は、その要素をきわだたせようとするねらいがあることを示唆したが、ここでいまひとつ議論の精密化を試みてみたいと思う。

発話において、話し手は、文のある要素に聞き手の注意を向けようとするものである。ここでErteschik(1979)にならって、dominance(卓越性: 訳語は筆者)という概念を導入する。話し手がある語に聞き手の注意を向けようとする時、その語は dominant である(卓越性をもつ)という。一般に英語では、文末の語が卓越性をもつことになる。この場合、文末の語が無標の卓越性をもつということにしよう。もし話し手が、文末以外の語に聞き手の注意を向ける必要がある場合、英語にはそれを実現するさまざまな手段が存在する。強勢の位置を変えたり、あるいは表現形式そのものを換えたりすることなどである。このような手段によって卓越性を与えられた語は、先程の無標に対し、有標の卓越性を与えられたことになる。これを“V-Prt”構文にあてはめて述べてみると、“V-NP-Prt”が基本形の場合に、話し手が文末の不変化詞に聞き手の注意を向けようとするのであれば、既にこの形式で不変化詞は無標の卓越性を与えられているので、語順を操作する必要はない。一方、文中の名詞句に注意を向けたいのであれば、その名詞句に有標の卓越性を与えるために、語順を操作してこれを文末にもってくることになる。このように考えると、基本形から交替形への派生を誘発する要因というのは、基本形では文末に

ない要素に有標の卓越性を与えようとする話し手の意図であるということができる。またこのような考え方をとると、“V-Prt”構文において、基本形から有標の構文を派生する操作には、すべて一律に、要素の右方向への移動が関わっているということになる。過去に、“V-Prt”構文の交替形への派生には、不変化詞の左方向への移動が関わっているとする研究があった(e.g. Emonds 1972, Dixon 1982)が、そのような分析では、上に述べた派生の本来の動機づけを正しくとらえているとはいえない。交替形への派生が、一様に要素の右方向への移動だとすると、我々は“V-Prt”構文には基底構造の異なる二つのタイプが存在すると考えたため、それぞれの変形の際、右方向に移動する要素も二つの異なるものを想定しなければならない。文字通りのタイプの場合、その基底構造は“V-NP-Prt”であるから、交替形への派生は、名詞句の右方向への移動(rightward NP movement)であり、一方、“V-Prt-NP”の基底構造をもつイディオムタイプの場合は、不変化詞の右方向への移動(rightward particle movement)を仮定することになる。

さて、従来の研究で、文中にある名詞句を文末に移動する規則として、重名詞句移動(heavy NP shift)が想定されることがあった。重い名詞句、つまり形態的に長い名詞句は、文末に移動する傾向にあるというものである。しかし、文末に移動する要因として単に形態的な長さを考慮するのでは、問題の本質をとらえているとはいえない。次に挙げる対照的な二つの例は、文の語順が単なる要素の長さで決まるのではないことを示している。

(48) "How will we keep our house warm in winter?" "I consider the problem of keeping our house warm in winter unsolvable."

(49) "That will take care of getting the food in; is there anything that looks like it can't be done?" "I consider unsolvable the problem of keeping our house warm in winter."

(Creider(1979: 10-11))

ここでは、文の語順を決定するのに、むしろ情報の新/旧という要因が関わっているといえる。

また、次に示す例も、単に要素の長さが語順の決定要因ではないことを示す例である。

(50) He is constantly going to London, and I am determined to find out why.

(Wood(1955: 19))

文末に現れている why は、要素自体の長さは短い。しかしここで、find it out と同様、find why out の語順にすることはできない。まさに why の部分が情報的に重要な部分を担っているからである。

そして、今述べた情報の新/旧、および情報の重要度といった概念は、結局、話し手が文のどの要素に聞き手の注意を向けようとしているか、すなわち卓越性という概念に還元できるものと思われる。この卓越性という概念は、ここでは、談話的要因とはとりあ

えず独立した、単一の文内における概念であると考えたい。確かに、“V-Prt”構文における語順の問題には談話的要因が絡んでおり、それは決して無視できるものではない。例えば、(48)-(49)に関して見たように、先行文脈に既に現れたいわゆる旧情報は、もはや新たな聞き手の注意を喚起しにくいし、逆に、初めて談話に登場する新情報は、卓越性を与えるに十分値するものである。したがって、先行文脈の諸要因が“V-Prt”構文の語順に影響を及ぼすことは否定できない。しかし、すべてにおいて、まず談話的要因があって、それによって語順が決定されると考えると、場合によって問題の本質を見失わせることになりかねない。それは、特に後続文脈との関連においてである。本稿で、卓越性という概念を、とりあえず談話的要因と切り離れた意味で使うのはそうした事情によるものである。そこで最後に、“V-Prt”構文の語順を談話的要因と絡めて論じた過去の一研究の問題点を指摘することによって、この点を明らかにしておきたい。

Chen(1986)は、“V-Prt”構文の語順を決定する談話的要因を客観的な数値的基準でとらえようとした研究である。Chenは、“V-Prt-NP”を基底構造と仮定し、不変化詞の文末への移動は、目的語名詞句の指示物が先行文脈との高い連続性をもち、後続文脈と低い関連性をもつときに起こりやすいと論じた。この研究の特異性は、従来あまり論じられることのなかった、この構文の語順と後続文脈との関連性について調べたことである。つまり、この点についての彼の主張は、不変化詞が右方向へ移動して“V-NP-Prt”の語順をとりやすいのは、後続文脈で目的語名詞句の指示物に関する言及があまりなされない時であり、逆に“V-Prt-NP”の語順になるのは、指示物に関する言及がより頻繁になされる時であるとするものである。しかし彼の議論の欠点は、因果関係を逆にとらえてしまっていることである。すなわち、後続文脈で名詞句の指示物に関する言及が繰り返されることから、その前の“V-Prt”構文で名詞句が文末に置かれているというのでは本末転倒である。むしろ、当該の“V-Prt”構文で、話し手は後続文脈とは無関係に問題の指示物に聞き手の注意を向けようとする意図で、それを文末の位置にすえるのである。この時、この指示物は、話し手の意識の中で卓越した地位をもっている。そしてその結果として、この指示物は後続文脈でトピックになりやすく、それゆえ、それに関する言及が頻繁になされると考えるべきである。したがって、“V-Prt”構文の語順は、当然後続文脈に影響を及ぼすが、逆に、後続文脈が先立ってこの“V-Prt”構文の語順に影響を及ぼすという考え方は適当であるとはいえない。要するに、“V-Prt”構文の語順は、その時点で話し手がどの要素に卓越性を与えようとするかによって決定されるのである。もし、その要素が基本形で既に文末の位置を占めていれば、そのままの形で提示すればよい。しかし、基本形でその要素が文末にない時は、話し手は有標の卓越性を与えるべく、語順を操作して、その要素を文末の位置にもってくることになるのである。

5. 要約

英語には、“turn on”、“look up”など、“V-Prt”結合を含む構文が存在し、この構文で不変化詞は、動詞の直後にも、また目的語名詞句の右側にもくることができるとされている。本稿では、この構文の基底構造を機能主義的観点から探ることをねらいとした。まず2章で、これに関する過去の研究のいくつかを取り上げ、特に、文字通りのタイプとイディオムタイプの構文とで異なる基底構造を仮定したAarts(1989)の研究に注目した。続く3章では、一般に英語では、基本形から変形によって派生した有標の構文には、基本形よりも厳しい制約が課されるという点、また文末に代名詞を許容しない構文は、文末にきわだちを与えようとする動機づけによって派生した構文であるという点に着目し、“V-Prt”構文は、“V-NP-Prt”の語順が基本形であるとした。ただしこれは、名詞句と不変化詞との間に主述関係が成立する文字通りのタイプについてのみあてはまるものであり、イディオム的な“V-Prt”構文については、動詞と不変化詞の語彙的結束性が強いとして、二つの語が隣接する“V-Prt-NP”を基底構造とした。さらに3章では、一見“V-Prt”結合と構造的に混同されやすい“get off”のような“V-P”結合に対し、トラジェクターやランドマークという認知文法概念を導入して、その構造的違いを明らかにした。これにより、“*get the bus off”のような語順が容認されない理由が明らかとなった。最後に4章では、基本形からその交替形への派生を誘発する要因を探った。そして、話し手が聞き手の注意を向けようとする要素が基本形で文末にない場合に、有標の卓越性を与えるために、その要素を文末に移動して派生形を生じると論じた。この有標の構文は、基本形では達成しえなかった特別な効果をねらって派生されたものであるから、それだけその構文には制約が課されることになり、文として容認されるための条件も厳しくなる。文末に情報量の小さい代名詞が容認されないのはこのためである。

注

1. Aartsは、ここでのいう不変化詞をEmonds(1972)と同様、(その目的語をもたない)前置詞とみなしているため、彼が実際に提示した構造は $[_{VP} V [_{IP} NP PP]]$ であるが、本稿ではその問題には立ち入らないため、本稿の主旨に沿って $[_{VP} V [_{IP} NP Prt]]$ と表記している。
2. “call on”は、本稿で扱っている“動詞-不変化詞”結合ではなく、“動詞-前置詞”結合である。
3. 最近の生成文法では、(19)の深層構造は $[_{IP}[_{VP} be [_{VP} shot John [_{PP} by me]]]]$ が仮定され、この構造から表層構造を派生するのに me 自体の移動はないことになり、後に論じる本稿の論旨にそぐわないことになるが、ここでは初期の生成文法理論を念頭に置いている。

4. (18)-(20)の文を派生する変形が、この動機づけによってのみ引き起こされているとは決して考えない。例えば、対応する能動文から受身文(19)への派生を引き起こすのは、まず第一に、問題の事態を特にジョン寄りの視点からながめるという動機づけであり、行為者をきわだたせるとするのは二次的な動機づけにすぎないと思う。なぜならば、受身文では必ずしも行為者を明示する必要がないからである。
5. 無標の構文も、文末に近づくほど重要度のより高い要素が置かれる、という情報構造の一般原則にある程度は束縛されることを強調しておきたい。例えば、与格構文は無標とはいえ、交替形として、有標の二重目的語構文が存在する。(両構文の細かい意味の差は無視するとして) ほぼ同等の真理条件を有する二つの形式の異なる構文が存在する以上、両構文の談話機能も異なって然るべきである。本文で論じたように、有標の二重目的語構文が、文末の **THEME** を表わす直接目的語をきわだたせる構文であるならば、一方の与格構文は、(無標とはいえ)やはり文末の **RECIPIENT** を表わす *to* 前置詞の目的語をきわだたせると考えたほうが、形式の異なる両構文の談話的機能の分化をよりうまく説明することになる。次の、*to* 前置詞の目的語に代名詞を用いた i) の与格構文も容認はされるものの、それよりも、ii) の二重目的語構文の方がより好まれるのもそうした理由のためである。
 - i) I gave a book to her.
 - ii) I gave her a book.
6. '重名詞句' (heavy NPs) という用語は、形態的に長い名詞句という意味で用いている。
7. 同じ主旨のことが、嶋田(1985: 44ff.)でも述べられている。
8. もちろん、"V-Prt" 結合が文字通りのものと、イディオム的なものとに明確に二分できるものでは決してなく、両者はその中間的な性格のものも含めて連続体を形成している。本稿の分析は、"V-Prt" 結合を意味的な観点から、一方の極に文字通りのタイプ、もう一方の極にイディオムタイプをすえ、そうした意味的な違いが統語的にも反映されるとして、二つのタイプに異なる基底構造を設定した。したがって、二つの異なる基底構造は、"V-Prt" 結合の両極にある二つの典型形の構造であると考えている。
9. O' Dowd(1998)も、本稿のように、文字通りの意味をもつ不変化詞は、コンテキストから推測される目的語が省略された前置詞であるとする立場である。

参 考 文 献

- Aarts, B. (1989) "Verb-Preposition Constructions and Small Clauses in English," *Journal of Linguistics* 25, 277-290.
- Bolinger, D. (1971) *The Phrasal Verb in English*, Harvard University Press, Cambridge.
- Chen, P. (1986) "Discourse and Particle Movement in English," *Studies in Language* 10. 1, 79-95.
- Chomsky, N. (1957) *Syntactic Structures*, Mouton, Hague.
- Chomsky, N. (1970) "Remarks on Nominalization," *Readings in English Transformational Grammar*, ed. by R. A. Jacobs and P. S. Rosenbaum, 184-221, Ginn, Waltham.
- Creider, C. A. (1979) "On the Explanation of Transformations," *Syntax and Semantics 12: Discourse and Syntax*, ed. by T. Givón, 3-22, Academic Press, New York.
- Cumming, S. et al. (1982) "Figuring Particle Movement Out or Figuring Out Particle Movement," ms., UCLA.
- Dixon, R. M. W. (1982) "The Grammar of English Phrasal Verbs," *Australian Journal of Linguistics* 2, 1-42.
- Emonds, J. (1972) "Evidence that Indirect Object Movement Is a Structure-Preserving Rule," *Foundations of Language* 8, 546-561.
- Erteschik-Shir, N. (1979) "Discourse Constraints on Dative Movement," *Syntax and Semantics 12: Discourse and Syntax*, ed. by T. Givón, 441-467, Academic Press, New York.
- Fraser, B. (1974) *The Verb-Particle Combination in English*, Taishukan, Tokyo.
- 福地肇 (1985) 『談話の構造』大修館, 東京.
- Kayne, R. S. (1984) "Principles of Particle Constructions," *Grammatical Representation*, ed. by J. Guéron et al., 101-140, Foris, Dordrecht.
- Kroch, A. S. (1979) "Review of Fraser(1974)," *Language* 55, 219-224.
- Kuno, S. (1979) "On the Interaction between Syntactic Rules and Discourse Principles," *Explorations in Linguistics: Papers in Honor of Kazuko Inoue*, ed. by G. Bedell, E. Kobayashi and M. Muraki, 279-304, Kenkyusha, Tokyo.
- Lindner, S. (1981) *A Lexico-Semantic Analysis of Verb-Particle Constructions with Up and Out*, Ph. D. dissertation, University of California, San Diego.
- O'Dowd, E. M. (1998) *Prepositions and Particles in English: A Discourse-*

- Functional Account, Oxford University Press, New York.
- Radford, A. (1988) Transformational Grammar: A First Course, Cambridge University Press, Cambridge.
- Ransom, E. (1977) "Definiteness, Animacy and NP Ordering," Proceedings of the Annual Meeting of the Berkeley Linguistic Society 3, 418-429, University of California, Berkeley.
- 嶋田裕司 (1985) 『句動詞』大修館, 東京.
- Suzuki, H. (1994) "On the Structure of the Verb-Particle Construction--A Critical Examination of Kayne(1984)'s analysis--," 言語文化論集 No. 38, 筑波大学.
- 高見健一 (1995) 『機能的構文論による日英語比較--受身文、後置文の分析--』くろしお出版, 東京.
- Wood, F. T. (1955) "Verb-Adverb Combinations: The Position of the Adverb," English Language Teaching 10. 1, 18-27, Oxford University Press, London.